愛知教育大学研究報告，59（人文・社会科学編），pp. 119～127, March, 2010

凶悪事件を起こした少年・青年たちの，育ちの問題を考える
―東京･秋葉原における連続殺傷事件加害者Ｋの生育歴等の分析を中心として―

木村隆夫

教職実践専攻

Problems in the Growth Environment of Youth who have Committed Atrocious Crimes
― Analysis of the Growth Environment of Offender K in Akihabara Incident ―

Takao KIMURA

Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

2008年６月に起こされた，25歳の青年Ｋ*1による，いわゆる秋葉原連続殺傷事件は，派遣社員による事件に注目されたことと，犯行前に「派遣切り」という名の解雇通告を受けていたことから，「派遣社員の前途を悲観した犯罪」として，一種の同情を含めた報道がされた。それまで，少年や青年の起こした凶悪事件については，凶悪さと被害者（同遺族）の立場に焦点が移り，死刑を求める厳罰的世論が沸騰していたことと比べると，その違いに驚きさえ感じた。インターネットによせられた意見の一部には，加害者を「派遣社員の救世主」として，英雄視さえするものもある。

こうした事件の原因・背景を知るためには，通常加害者の詳細な生育史や生育環境の調査が必要であるが，少年事件の場合は，裁判所や公的機関から情報が公開されないため，周辺の人々からの根気強い聞き取り調査が唯一の手段であり，協力を得られないことも多く，苦慮するのが実態である。成人の場合は，刑事裁判で一定程度の情報は示されるものの，裁判上のかけひきを背景として一側面を強調して提供されることが多いので，調査資料としてはそのことを念頭に置き，鵜呑みにせず，少年の場合と同様に，周囲の聞き取り調査を加味しつつ活用しなければならない。

ところが，この事件については，実弟が週刊誌に４度に渡って手記を発表したことで，事件直後から，加害者Ｋの生育史や家庭教育の実態を知ることができた。その内容は，事件当初にマスコミが報道した「非正規雇用の不遇感からの犯行」という推測は，事実の一側面にしか過ぎず，生育史において，幼少から親の支配のもとで競争の世界に投げ出され，心を傷つけられ自尊感情が育てられない生き方を強いられてきたことが明らかにされた。以下実弟の手記を基にして，加害者Ｋの育ちと教育上の問題点を見ていきたい。同時に，いくつかの「優秀」と言われる青少年起こした凶悪事件と対比し，彼らの育ちの問題について考えたい。

Ⅰ　秋葉原連続殺傷事件加害者Ｋの子育てと教育をめぐる問題

１　加害者Ｋの生育史と生育期の社会的背景

Ｋの生育史を，実弟が週刊誌に発表した手記を基に図式化したのが表Ⅰである*2。

Ｋの出生時から小学校時にかけては，幼児期からの早期教育がもてはやされた時期に当たる。当時の状況について加藤繁美は，「1992年12月に『ママ，私をどう育てたいの』というタイトルのつけられたテレビ番組が放映された。この番組は，公文幼児教室を中心に最近の早期教育の実態をリポートしたものである。『私の頭はコンピーター』という作文を書き，ピアノを華麗に奏でる４歳の女の子，大学教養課程で学ぶ『多変数関数』に取り組む小学１年生，小学校受験用の模擬テストを受験する幼児たち，そしてお腹の赤ちゃんに真顔で『ひらがな』を教えようとする胎児塾の母親たち。番組そのものは，幼児英才教育の風潮と，それを支える親の意識に疑問を投げかける形で構成されていたが，番組制作者の意図とは別に，その反響は多様であり，当事者である親たちには，逆に一種の焦りを感じさせたりした」（筆者要約）*3と報告している。

加害者Ｋの両親が，こうした早期教育の風潮にどれくらい影響されていたのかは不明であるが，後で見るＫと弟に対する教育の強制を見ると，相当影響を受けていたのではないかと推察される。

また，1990年代当初は，「母親が甘やかせるから子ど

表１　加害者Ｋの生育史

年・月	本人の出来事	家庭での出来事	社会の事件	備考
82.9	青森市で出生		80 年代初頭からお受験ブーム	
84.	弟出生		82　校内暴力がピーク 83　野宿生活者への殺人事件が連発	91「母原病」ベストセラー
89.4	地元の小学校に入学・ 運動・勉強ともよくできた		88 名古屋アベック惨殺事件 89 足立区女子高生監禁殺人・埼玉幼女連続殺人事件	92 戸塚ヨットスクール事件判決
小５	祖母宅に家出（弟の手を引き１時間歩いて到着）	Ｋが小学校高学年の頃から家庭不和		
小５？	母が積雪のある戸外に長時間放り出す（近隣者が目撃、母に忠告したが聞かず）		93　山形マット巻死事件	93 ころ　ブルセラショップ、援助交際が話題に
95.4	地元の公立中学進学。公務員家庭が多くエリート校と見られていた		94 愛知Ｏ君いじめ自殺事件 95 阪神大震災・地下鉄サリン事件	95 文省「いじめ対策会議報告」
中１	成績はトップクラス、テニス部で活躍、女性にももてていた 食事中に母が逆上、床にまかれた食料を泣きながら食べる		97 神戸児童殺傷事件犯人（中３生）逮捕 98 栃木黒磯中女教師刺殺事件	
中３	母を殴打、以後母の過干渉に歯止めがかかる			98 ころ　ストーカー被害が話題に
98.4	県立Ａ高校進学（進学校）「一挙に普通の人になる」（弟述）成績は中の下	高校合格を家族中で祝福	99　下関通り魔事件・犯人は１級建築士	
高１夏	家出。テニス部顧問教師に、家庭での不満を長時間語る	父単身赴任 母友人に「Ｋが怖い」と語る	00　豊川高校生主婦殺人事件、5000 万円恐喝事件、佐賀バスジャック事件	
01.4	Ｇ県Ｎ自動車短大入学 成績はトップクラス、しかし、就職活動も、整備士となる努力もしなかった。		01 大阪池田小児童殺害事件	
03.3	Ｎ短大卒業		03 長崎中１生幼児突き落とし殺人	
03.7 ～ 05.2	仙台市で交通整理員（派遣）			04 ひきこもり・ニートが社会問題
05.4 ～ 06.4	埼玉県内の自動車関連工場（派遣）			
06.5 ～ 06.9	茨城県内の工場勤務（派遣）	父母に離婚話生じる		
07.1 ～ 07.9	青森県内で運送会社勤務（正社員に登用）・一身上の都合で退職		08.3.23 土浦市荒川沖駅前 8 人殺傷事件	
07.11 ～ 08.6.3	静岡県内の自動車工場（派遣） 月内での契約解除通告		08.3.25 岡山駅突き落とし事件	
6.5	作業服がないとして激高			
6.8	秋葉原で犯行			

もが悪くなる」という風潮が高まっていた時代でもあり，「母原病」という新語が流行語になったりしている。久徳重盛は著書「母源病」のなかで，「アレルギー性ぜんそくをふくめて，ぜんそく児の付き添いでくるお母さんには大まかに２つのタイプがあります。一つは過保護型の母親で，もう一つはガミガミ型の母親です。こうした母親と接していると，子どもは性格ばかりではなく，体質まで決定されてしまうのでしょう。

子どもの病気の原因が，子ども自身ではなく，お母さんの子どもとの接し方にあるのですから，まずそれを直さなければならない，われわれ小児科医はこのような種類の病気を『母源病』と読んでいます」（筆者要約）[*4]。「母源病」の新概念は，子どもの行動や健康上に生じる問題のほとんどを，母親の子育てに還元するという現象を起こし，子育てに対する不安をこれまでになく高まらせることになった。このころから，少子化が問題となるが，その原因の一つに，女性の中にある過度の子育て不安が指摘されている。

一方，社会の動きを見ると，バブル経済が崩壊し，企業倒産と失業が深刻化した時期でもあるが，このころ，経済界が積極的に教育の改革を政府に提言している。村田徹也は「経済界が政府に求めたのは，従来の平等主義の教育を多様化して能力別の複数の教育コースを設けること，及びその上級コースにおいてはグローバル経済のもとでの，エリート（指導的人材）の養成を目指すことであった。教育の多様化と並行して主張された『教育のスリム化』は，すべての子どもに同様な教育を行うのは非効率的であるから，早期に選別を行い『下層コース』は切り捨てていくというものである。『できない子には，よりいっそうの手をかける』という従来の平等主義の教育は経済界にとっては『非効率的』 な教育でしかなかった」[*5]と述べている。

こうした社会風潮に，Ｋの両親（特に母親）がどれくらい影響を受けていたのかは不明であるが，おそらくは「せめて人並みに」との願いが，「厳しく育てないと子どもが駄目になる」という風説に影響され，その上企業倒産と失業率の増加という社会不安を目の前にして，ますます視野の狭い，支配的・強制的子育てになってしまったのではないかと推察する。

２　弟の手記から見る，加害者Ｋの受けてきた子育てと家庭教育

まずは，Ｋが小学校時代から中学校にかけて，母親から受けた子育てと家庭教育の状況を見てみたい。弟は週刊誌に次のような手記を発表している。「犯人（兄）は，携帯サイトの書き込みの中に，親が書いた作文や絵を学校に提出したと言っていた。実際は，作文に関してはテーマや文章を，絵に関してはテーマや構図を母が指示する。与えられるテーマの根底にあるのは『先生受け』，私たちはまるで機械のように，それに従って文章を書き，絵を描く。こうして母の狙い通り，先生たちはその文章や絵をほめてくれた」[*6]。「母は私たちの書く，作文には必ず目を通した。私はそれを『検閲』と読んでいた。母は検閲によって，私が書いた言葉を，先生受けする言葉に書き換えた。母は完璧なものを常に求めてきた。一字でも間違えたり，汚い字があると書き直しを命じた。書いては捨ての繰り返しで，一つの作文ができあがるまでに，一週間近い時間がかかるのが常だった」（筆者要約）[*7]。

日常生活面でも，母親は勉学中心の生活を強制し，勉学の邪魔になると思われる，テレビの視聴や男女交際を厳しく制限していたようである。弟の手記では，「兄は『オタク』と言われているが，子どもの時にはそんな要素は一つもなかった。テレビは一階に一台あったが見ることは禁止されていた。許されていたのは，『ドラえもん』と『日本昔話』だけで，私は中学二年になるまで，この二つの番組しか見たことがなかった。テレビを見る習慣は家にはなく，ニュースさえも見なかった。ゲーム好きという報道もあるが，兄がゲームを長時間している姿を見たことがない。ゲームは土曜日に一時間だけというのが，家のルールであった」（筆者要約）。「漫画や雑誌を読んだことがない。さらに，家に友達を呼ぶことも，友達の家に行くことも禁止されていた。ただし特別扱いの友人が，兄に一人，私に二人いて，その友達だけ呼ぶことが許されていた」「母は男女の関係に関しては，過剰なまでの反応を見せた。兄が中学生の時，クラスの女の子から年賀状が来たことがあり『好き』と書かれていたと記憶している。なぜかそれが，見せしめのように冷蔵庫に張られていた。中学一年の時，私にも女の子から同じようなはがきが来たが，食事の時に母がバシッとテーブルにたたきつけ，『男女交際は一切許さないからね』と言った」（筆者要約）[*8]。

母親の子育ては当然ながら，親族から違和感を持ってみられていたようである。父方叔父によると，「小学校４・５年の頃，弟を連れて家出をし，１時間以上もある祖父母の家まで歩いてきたことがある。祖母の顔を見たとたん泣き出し『母に家を出て行けと言われた』と。でも，甘やかす祖母に両親は，『教育に干渉しないで欲しい』と頻繁に告げた。中学にはいると盆や正月にも孫を連れてこなくなった」[*9]と述べており，母はＫ兄弟に愛情を注ぐ祖父母との関係をも断ち切り，視野の狭い子育てと勉学のみに偏った家庭教育に，ますます埋没していったようである。おそらく当初は，勉学に集中させるためであっただろう母の支配は，子どもたちが幼くて抵抗できないことから，さらにエスカレートをした異常なものになっていったようである。弟の手記では，「自由にものを買うこともできなかった。本を買うときには何が欲しいか伝える必要があり，さらに読んだ後に読書感想文を書いて，母に見せなければならなかった。本だけではなく，モノが欲しいときは，常に母に許可を取る必要があったので，私はモノをほしがることがなくなった」。「兄が，中学一年の時，なぜそうなったのかは忘れたが，食事の途中で母が突然兄に激高し，廊下に新聞紙を引き詰め，その上にご飯や味噌汁などのその日の食事を全部ばらまいて，『そこで食べなさい』と言い放った。兄は泣きながら新聞紙の上に積まれた食事を食べてい

た。そのとき父も黙っていた」（筆者要約）。

弟によると，当初からこのような緊張した家族関係であったわけではなかったようである。「（弟が）小学生の頃はごく普通の幸せな家庭。夏休みには毎年，家族と旅行に出かけ，食事の時も笑って話し合ったりしていた。兄との関係もその頃はよかった」「（弟が）小学校４年の頃から，家庭の中が少しずつ冷えていった。１年たつごとに家族の中がだんだん悪くなっていった。原因は分からない。家族が顔を合わせるのは食事の時だけ，それも無言で食卓を囲み終わるとそれぞれの部屋に引き上げる，そんな生活であった」[*10]。

Ｋがいくつの頃から母が厳しくなり出したのかは明確に書かれているわけではないが，小学校の高学年になってから厳しく対処しだしたことが推察される。週刊新潮では，近隣者の証言として，次のような記事を掲載している。「実家近所の主婦は，Ｋがまだ小さい頃，なんの罰なのか，冬の寒い夜に薄着で外に放り出されているのを見たことがある。小学校の頃から珠算やスイミングスクール，学習塾に通い，他の子どもたちが遊んでいるのを，羨ましそうに見ていたのが印象的だった」[*11]。

３　Ｋの反抗開始

Ｋが家庭でなぜ屈辱的な子育てに耐えてきたのであろうか。普通であれば，思春期の早い時期に，親の支配を排除するために，爆発して抵抗するか，非行と言われる行為を重ねるなどして，自らを傷つけることで親に屈辱的な体験をさせる，あるいは心を閉ざし引きこもり，親との関係を断つ少年が多いが，中学のＫが，母親の言うままに，「泣きながら新聞紙の上に積まれた食事を食べる」ような行為をした主な理由は，小・中学校時は，母の指示通り「先生受けをする作品を作った」などにより，優秀な生徒として周囲から賞賛されていたためではないかと思われる。「『明るくて活発な子どもだった』と，親類や同級生が振り返るように，小中学校時代，彼は勉強ができてスポーツマン。中学の文化祭では合唱コンクールでクラスの指揮者としてリーダーシップを発揮し活発だった。中学１，２年の時には同級生公認の『彼女』もいたし，中学卒業時の成績は学年（約300人）で１，２を争うほどだった」[*12]。

Ｋは，学校や家庭外では，「優秀な子ども」という周囲の賞賛で，辛うじて自らを支えて「よい子」を演じ，家庭では母親からの屈辱的な支配に従順に従うという，二重の苦しみを味わっていたのであろうか。Ｋは事件を起こす直前に，携帯電話に次のような書き込みをしている。「考えてみりゃ納得だよな／親が考えた作文で賞を取り，親に無理やり勉強をさせられてたから勉強は完璧。／小学生なら顔以外の要素でモテててたんだよね，俺の力じゃないけど」「親が周りに自分の息子を自慢したいから完璧に仕上げたわけだ／俺か書いた作文とかは全部親の検閲が入っていた」[*13]

ついに，Ｋが屈辱の連鎖を断ち切る日が来た。弟の手記によると，「兄が爆発したのは中学３年の時。兄が母を殴ったのだと理解した。それ以降兄が母を殴っているのを見たことはないが，感情を爆発させることを覚えたのであろう，暴力の矛先が向けられたのが部屋の壁。兄の部屋の壁は穴だらけになっていた。学校でも何かいらいらすると，素手で教室の窓ガラスを割ったことがある。兄が，血まみれになって家に帰ってきたことを覚えている」[*14]。

ここで注目されるのが，母への反撃をした時期が神戸の児童連続殺傷事件と重なり合っていることである。週刊新潮は母の友人の談話を掲載している。「Ｋが高校１年か２年の時，父は仙台に単身赴任していた。たまに弟が仙台に遊びに行くと，Ｋと母の２人になる。母があるとき『２人で食事をするのは怖いのよねぇ』ともらしたことがある。『なんでぇ』と聴いたら，『酒鬼薔薇みたいで怖いのよ，同い年だしね』と暗い顔で言うので，あまり踏み込んでは聴けませんでした。Ｋの部屋に入れないと悩んでいました，入ると叱られると」[*15]

Ｋの母への反撃は「酒鬼薔薇聖斗（少年Ａ）」に刺激を受けた可能性が大きいと筆者は見ている。神戸児童連続殺傷事件は，史上例の少ない手口の残忍さにもかかわらず，意外なことに子どもたちの間で共感を呼んだと言われ，能重真作はその一例として，ある中学生の自死事件を紹介している。「少年Ａが容疑者として逮捕され，マスコミが連日報道しているさなか，福井県のある町で，中学１年の少年が，『自分も一皮むけばこんな人間だと分かりました。自分が何もしないうちに死ねればそれでよかったのです』というメモを残して自殺している。この日終わった期末テストで，彼は平均85点という成績だったという」[*16]。この少年は，ときには爆発したくなる自分を酒鬼薔薇聖斗に投影し，いつかは彼のような事件を起こしかねないとおそれ，自らの命を絶ったのであろうか。

能重はさらに，酒鬼薔薇聖斗に対する共感が，子どもたちのなかでかなりの広がりを見せていたことを紹介している。「新聞やテレビが，14歳の子どもたちの意見を紹介していたが，『人を殺すのはよくない』としながらも，『少年の気持ちはわかる』という者が少なくなかった。毎日新聞が行った全国調査では，おおよそ３割の子どもが理解ないしは共感を示していたという」[*17]。このことは，多くの子どもたちが，Ｋが受けてきたように，親や教師をはじめとした大人たちからの支配と重圧，それに，終わりのない競争に苦しめられているが，その立場を酒鬼薔薇聖斗に投影し，一部には彼を英雄視さえするようになったのであろう。

4　Kの挫折と生きる意欲の喪失

中学では，優秀な学業成績を収めていたKは，県下有数の進学高校に進学するが，彼の挫折はそこからスタートする。弟は次のように述べている。「地域でも一番の人間が集まるA高校に入学した。両親に祝福されて高校に入学したが，秀才ばかり集まっていたので，あっというまに普通の人になった。母も成績では注意をしたが，兄は聴こうともしなかった。そのとき母の期待は私に移ったんだと思う。私への愛情の移行を，兄は敏感に嗅ぎ取り，自分は必要のない人間だと誤解したのだと思う」[*18]。K自身も，事件を起こす少し前に，携帯電話に，「県内トップの進学校に入って，あとはずつとビリ高校出てから8年，負けっ放しの人生」[*19]と書き込んでいる。

高校卒業後Kは，周囲の予想を裏切り，有名校とはいえないG県の自動車関係の短期大学に進学する。弟は，「兄は高校を卒業して，G（原文は実名）にある短大に入学した。兄は車が大好きで，子どもの頃からよく車のプラモデルを作っていた。G（同上）ではバイクに乗っていた。バイクで青森（同上）まで帰省したこともある。サーキットでレーシングチームのスタッフとして働いていたこともある」[*20]と述べており，Kなりの目標を持った進学であったようである。

しかし，Kが入学後は，資格の取得や就職活動などの努力を積み重ねた形跡が見られない。「KがA高校を卒業して進学したN自動車短大は，広大な敷地に，九百名の学生が通い，うち二百名は外国人留学生である。（中略）1年生のうちで半分近くが就職の内定を受け，2年生の春にはほぼ全員の進路が決まっている。だが彼は就職活動をするわけでもなければ，自動車整備士の資格を取るために自動車整備振興会に出向いて実技免除のための講習を受けることもしなかった。（中略）大学事務局長は，『あれだけの成績であれば，指定校枠のある一流自動車メーカーに難なく就職できたのに，なぜ派遣会社を選んだのか』と不思議に思うくらいであるという」[*21]「はじめは『トヨタで自動車を設計したい』と夢を語っていたが，卒業間近になって『中学の教師になりたいので弘前大学に編入する』と言い出した。結局編入もかなわず，整備士の資格も取れずじまいで，進路も就職先も決まらないままで卒業した（短大関係者の話）」。[*22]

難関大学へ進学できなくとも，自動車関係の分野で能力を開発する展望が見えていたにもかかわらず，Kはその道を歩む努力をしていない。筆者は，この大学に入学したことで，彼にわずかに残っていた「優越感」が粉々に砕かれ，「劣等感」が支配して，自尊感情をも喪失することになったのではないかと見ている。Kは自ら選んだ大学が，難関校ではないことは十分承知していたのであろうが，入学してみて予想以上の実態に，さらなる挫折感と絶望感を抱いたのでのではなかったかと想像する。一部の報道では，「大学卒業時に，弘前大学を受験して失敗した」と報道されているが，筆者の調査では受験の事実は確認できなかった。

5　挫折克服への努力

Kは，派遣社員として5年間働き続ける。Kがなぜ正規社員ではなく派遣社員の道を選んだのか，筆者はKは管理されることを嫌ったためではないかと見ている。Kは母親から徹底的に管理され続けてきており，そのトラウマが重くのしかかっており，管理される生き方を拒否する気持ちはよく理解できる。Kのように管理された生き方を避けようとする人のなかには，相対的に自由な就労ができる，非正規社員の生き方を選択する人も少なくない。Kも一時は郷里に戻り運送会社の正規社員として就職しているが，すぐに退職して派遣社員に戻っている。Kは派遣社員として，家族と距離を取りながら自ら働き，自分なりに「自立」への努力を積み重ねてきたのだと見ることもできる。

一方彼は，「孤独感」「劣等感」にさいなまれており，その克服に向けてか，周囲の人に自ら接触を求め，ともだち関係を大切にし，悩みを訴えていたことが報道されている。Kは高校時代に，ソフトテニス部の顧問に家庭事情を打ち明けている。「練習も休みがちの彼について，ソフトテニス部の顧問は強烈に覚えていることがある。高校1年の夏家出をしたのだ。顧問は彼と2～3時間話した。母親が厳しいこと，父親はおとなしくて何も言わないが，かまってくれないこと。彼は家族のことをずっと話し続けた」[*23]。

派遣社員として稼働していたときにも，親しく付き合う仲間がおり，週刊朝日は次のようなエピソードを紹介している。「友達がいないかのように言われているKであるが，静岡には毎週一緒に過ごす仲間がいた。3月下旬には，親しい友達3人を連れて秋葉原を案内したこともあった。昼前にアキバについた。Kさんがぐいぐいと路地裏に引っ張ってくれて。慣れた様子でメイド喫茶に入り，メイドがケチャップでイラストを書いてくれるオムライスを『これだけは食べて欲しいんだ』と3人に薦めてきて，みんなの分をおごってくれた。そんなKを静岡の友人たちは暖かく迎え入れていた」（筆者要約）[*24]。

このように，Kは積極的に友人を求めていた上，頻繁に書き込む携帯電話でのコミュニケーションも，惰性になりかけていたとはいえ，彼の必死のあがきなのであったのだろう。小中学校の時代に母の妨害で止められた，友達との交際の穴を埋めようとしているかのように，あるいは，挫折後彼を激しく襲ったであろう，孤独感や劣等感を何とかして乗り越えようとするかのように，頻繁に会話をし，情報を交換しているが，彼の生きる力の回復には至らなかった。

このように，数多くの人々と，相談や会話を重ねな

がらも，Kがなぜ自尊感情を回復させ，生きる力を獲得できなかったのだろうか，携帯電話への書き込みを見ると，高校入学後の挫折がずっと尾を引き，そこから一歩も踏み出せない呪縛された心理状況が垣間見られる。「負け組は生まれながらにして負け組なのです／まずそれに気づきましょう／そして受け入れましょう」「報われない努力は，人の心をむしばみます。生き方を変えれば，穏やかに幸せに生きれます」[*25]。

6　連続殺傷事件に導いた，不満・ストレスのためこみと直接的原因

Kの犯罪の動機として，派遣社員の恵まれない境遇に絶望感を感じたことという見方が多くされているが，Kの生育史等を見ると，派遣社員の境遇への不満だけではなく，父母への不満，歪んだ子育てからくる屈辱感と歪んだエリート意識・挫折感などが蓄積されてきたことが伺われる。犯行の直接的動機の一つとして，派遣社員としての恵まれない境遇と，派遣先で解雇通知を受けたことが大きく影響していることは間違いないと思われるが，本犯行に至った土台としては，生育史のゆがみの存在を忘れてはならない。

Kと同様に，犯罪・非行歴がなく，突如世間の耳目を衝動させる事件を起こす人の行動を分析してみると，①生育史上の問題点を含む，不満・ストレスのため込み(精神・知的・発達障害による二次被害も含む)が限界に達する。②同じ境遇の人が事件を起こすなどすると，本人もその衝動にかられ，結果として解消方法の学習をする機会が生じる。③さらに，引き金となるできごとが発生。④ついに爆発（犯行）との経過をたどることが多い。以下Kについてその経過を見ていきたい。

⑴　不満・ストレスのため込み

小学校高学年となってからの生育上の状況はこれまで見てきたとおりであり，Kは相当の屈辱感とストレスを蓄積してきている。逮捕後，３ヵ月に渡って精神鑑定を受けているが，これまでの報道では精神障害は否定されており，発達障害の問題もなかったようである。秋葉原という土地，携帯電話，モテないことへのこだわり等を見ると，発達障害の人の行動パターンと似たところも見られるが，中学時代は学校では明るく，クラスのリーダーとして活躍していたことから考えると，発達障害の疑いは否定してもよさそうである。

事件を起こす前の，彼の屈辱感とストレスは，孤独とモテないことへの劣等感で増幅されていたようである。週刊新潮では，「Kが日記代わりに胸中を吐露していた携帯電話の掲示板には，犯行日前の数日間を見ただけでも，『彼女さえいればこんな惨めに生きなくていいのに』『不細工な俺には絶対彼女が出来ないもの』『彼女がいない，この一点で人生崩壊』『助手席に女を乗せているやつに税金をかければ日本の財政難は解決すると思う』『どうせ不細工なおっさんですよ』友人の前では強がっていたものの，頭の中では『生身の女』へのあこがれとコンプレックスがドロドロに解け合って煮えていた」[*26]と紹介している。

⑵　蓄積した屈辱感と将来への不安を，凶悪事件で一挙に解消する方法を学習

不満が蓄積する中で，彼にとって人ごとではない凶悪事件が身近に発生する。先に述べた神戸児童連続殺傷事件は，これまで抵抗ができなかった母親への反撃の勇気を与えるきっかけとなったと筆者は見ている。

Kの犯行前に，相次いで起こされた，「岡山駅突き落とし事件」と「荒川沖駅前無差別殺傷事件」には，強く影響を受けたようであり，「人と関わりすぎると怨恨で殺すし，孤独だと無差別で殺すし難しいね」「『誰でもよかった』なんか分かるような気がする」(08. 4．20携帯書き込み)[*27]と，加害者に共感する書き込みをしている。しかも，「荒川沖駅前無差別殺傷事件」の加害者は，事件を起こす前は仕事につかず，秋葉原のホテルを転々として生活しており，週末には秋葉原で過ごすことの多かったKとも接点があったのではないかと思えるほどである。Kは「荒川沖駅前事件」の加害者に自己を投影しており，携帯電話に「欲望に率直になっていいのでしたら，繁華街の歩行者天国へトラックでつっこみたいです／そんなことはしませんけど」。(08. 4．20書き込み)[*28]と書き込んでいる。その上，事件がワイドショーでセンセショナルに取り上げられたことにも大きく影響されたようで，後日犯行に踏み切る強い動機付けにもなっている。

⑶　引き金となるできごとの発生と犯行までの経過

Kの凶行の引き金となったのは，これまで報道されてきたように，解雇通告を受けたことである。「300人規模のリストラだそうです／わたしはやはりいらない人間です」(08. 5．28書き込み)[*29]と，さらに，職場で「つなぎ」（作業服）が見あたらなかったことであるが，そのころに，携帯サイトで無視をされたと感じたことも引き金の一つになっているようである。

その後，Kがますます追い詰められ，自暴自棄になっていく状況が，携帯電話の書き込みにリアルに表現されている。犯行４日前の６月４日には，「どうせ今月でクビだ／好きなようにやらせてもらう」「勝ち組はみんな死んでしまえ」「どうしてみんなおれを無視するのか／不細工だから／終了」「彼女さえいればこんな惨めに生きなくていいのに」，３日前の６月５日には，「彼女がいない，ただこの一点で人生崩壊」「誰でもよかった／なんだか分かるような気がする」「私より幸せな人をすべて殺せば，幸せになれますか？　なれますよね」。６月６日には，「一花咲かせてみたいものだね」「やりたいこと…殺人…夢　…ワイドショウ独占」「幸せになりたかった」と続き，６月７日には

ナイフを買うなどして犯行の準備をする様子を，携帯メールに書き込んでいる。そして，犯行当日の６月８日には，「秋葉原で人を殺します。車でつっこんで，車が使えなくなったらナイフを使います。みんなさようなら」「途中で捕まるのが一番しょっぱいパターンかな」(08. 6．8書き込み)*30と，犯行突入の状況を書き込み，自爆テロのように犯行に突き進んでいった。携帯電話に書き込まれているので，かなりの人が，犯罪行為の示唆や彼の心の動揺を見ているはずであるが，本心とは思わなかったのか，制止しようという人はいなかったようである。

一方犯行をためらうような書き込みも見られる。「ちょっとしてきっかけで犯罪者になったり，犯罪を思いとどまったり／やっぱり人って大事だと思う」(６月５日)「店員さんいい人だった」「人間と話すってのはいいね」「タクシーのおっちゃんとも話した」(６月６日)*31との記述も見られる。「止めて欲しい！」という彼の願いが秘められているようでもあるが，犯行を止めてくれる人と出会うことができなかったことから，結局最悪の事態へ突き進んで行ったのであった。

Ⅱ 「優秀」といわれた青少年の凶悪事件の発生の原因と特徴

１ 「優秀」といわれた青少年の凶悪事件の概要と特徴

⑴ 東京W高校生祖母殺害事件（1979. 1）

有名な進学高校に在学する少年が，祖母を金槌で殺害し，犯行後近くのビルから飛び降りて自殺をした事件である。少年はノート40ページに及ぶ遺書を新聞社に送ってきたが，内容は，「エリートをねたむ下劣な大衆」と，ことごとに自分に干渉する祖母への非難が中心であり，犯行はそうした人たちへの警鐘であると記述している。家庭は，父は大学教授，母は脚本家，母方祖父も有名な大学教授というエリート一家。本件の２年前に父母が離婚し，母・妹とともに，母の実家で生活していた。少年の遺書を見ると，母方祖母が少年に密着し，異常に強い愛情で，少年の一挙一動まで干渉していたことが，リアルに表現されている。(本多勝一「子ども達の復讐」朝日新聞社参照)

⑵ 豊川私立高校生の主婦殺人事件（2000. 5）

17歳の進学高校２年生が，通学していた高校の近くの民家の主婦を殺害し自首した事件である。取り調べでは「殺人体験が必要だった」と述べ，社会にショックを与えた。家族は祖父母と父。両親は少年が１歳半の時に離婚，以後父に引き取られ，祖母を母として育った。祖父母は厳格にはしつけていないと述べているが，本人は事件後「父や祖父は尊敬している，でも僕のことを分かっていない」と述べていた。精神鑑定では，アスペルガー症候群と診断された。性格的には几帳面で潔癖で強いこだわりが見られる。

⑶ 佐賀バスジャック事件（2000. 5）

17歳の精神病院に入院中の少年が，外出許可で病院を出て，すぐに高速バスに乗り込み，途中でバスジャックを行い，15時間にわたって乗客を監禁し，68歳の女性を殺害した事件である。

家庭は，共働きの両親と妹。小学校時から成績は良かったが，運動が苦手でいじめの対象とされていた。中学でも成績は抜群であったが，級友から挑発されて校舎の２階から飛び降りたとき，腰骨を骨折し，県下一の進学高校への進学を断念して，挫折感が強まっていた。精神鑑定では，解離性障害と診断された。

⑷ 奈良高１生自宅放火殺人事件（2006. 7）

中高一貫制の，有名な進学高校に在学する高校１年生が，自宅に放火して，家屋を全焼させ，継母・妹・弟を焼死させた事件である。犯行後自転車で逃走したが，途中サッカーのワールドカップの試合を見たいと民家に侵入し逮捕された。犯行の動機は，成績が下がったのに，上がったと嘘を言っていたが，母が保護者会に出席して嘘がばれることを恐れて，放火し母を焼死させようとしたもの。

家庭では，医師である父が，少年を将来医師にするために，勉強部屋を「集中治療室」と呼び，勉強を強いていた。体罰も日常茶飯事で，少年審判では，「虐待が行われていた」と認定している。

少年は，逮捕後に面会した弁護士に，「いやな思い出ばかりの家は燃やしたかった」「留置場は勉強をしなくても良いので天国」と語っていたという。精神鑑定で広汎性発達障害と診断されている。

２ 各事件の共通事項

①の「W高校生祖母殺害事件」は，他の事件と違い，発生時期が30年以前のものであるが，当時社会の注目を集め，本多勝一によって詳細な取材と分析がされ，「子どもたちの復讐」(朝日新聞社刊）という単行本にまとめられているので，内容を詳しく知ることができる。青少年の凶悪事件は，最近になって発生し始めたかのような主張がされているが，以前から散発的に起こされており，最近になって発生し始めたものでも，急増したものでもない。

「W高校生祖母殺害事件」の内容を見ると，教育要求の強い祖母に徹底的に監視されてきたことに，憎悪を蓄積してきた高校生が，祖母を殺害し自らも生命を断ったもので，「秋葉原事件」と共通するところは多い。加害少年の資質について，当時は発達障害についての社会的認識がなかった時代であり，当然触れられていないが，遺書に顕れている特定の事項へのこだわりや，認知の偏りを見ると，あるいは発達障害を抱えていたのではないかとも感じられる。この事件のキーワードを上げると，「勉強・進路の強要」「孤独・孤立」「視野の狭さ」「エリート意識と優越感」であり，「エリート意識と優越感」以外は「秋葉原事件」と一致す

る。Kは極度の「劣等感」を持っていたのと対極のように見られるが，「エリート意識」と「劣等感」は実は表裏の関係にある。Kも中学時は，「エリート意識」を持ち，それで自分を支えていたに違いない。

各事件の加害者に多く見られるのが発達障害である。「W高校生祖母殺害事件」の加害者も発達障害を抱えていた可能性が強い。発達障害それ自体は犯罪の原因ではないと言われており，発達障害への社会的無理解からくる，２次被害が犯罪を誘発することがあるとされている。日常生活面では，親たちに細かいことまで支配されていたり，勉学や進路の極端な押しつけがされていたことが共通している。

3　加害者たちの育ちから見る事件の原因と背景

最後に，凶悪事件を起こした青少年の育ちの問題を考えてみたい。碓井真史は，秋葉原事件の加害者Kの行動を，育ちの不全が主要な要因であるとして，①気力を奪う過剰なしつけ，②過剰な愛情が自立を奪う，③服従が与える，強い不安感，④体罰の恐ろしい副作用，⑤自由や創造性をつぶす，親のエゴ，⑥「甘え」の不適切な表現，⑦過度なしつけが，子どもの心を奪う，⑧「思春期挫症候群」，⑨コミュニケーション不足による，憎悪などと分析している[*32]。

碓井の分析を参考にしながら，凶悪事件を起こした青少年一般の傾向を見てみたいが，「秋葉原事件」と「W高校生祖母殺害事件」以外は，十分な資料がないので，２つの事件を中心に考えてみたい。

⑴　親たちの過度の支配と生き方の押しつけが，気力と生きる力を奪う

全事例とも，家庭における過剰な期待からくる不適切養育と勉強や習い事の押しつけという心理的虐待に，主要な問題点があることは確かである。「奈良高校生自宅放火殺人事件」の加害少年が，「警察の留置場は，勉強をしなくてよいから天国」と弁護士に語っている事実が雄弁に物語っている。分かる喜びを知り，生きる力を育てるはずの勉強が，心理的虐待のもとで行われたとすれば，人格形成上で深刻なゆがみを生み出すことが考えられる。大学入学後のKの行動を見ても，苦境の中から人生を切り開く，青年らしい意欲が感じ取れない。小・中学校時代の不適切養育により，気力と生きる力が奪われてしまったのではないかと感じられる。

⑵　「よい子」「優秀な子」がなぜ凶悪事件を起こすのか？

ではなぜ「よい子」「優秀な子」と見られていた青少年が，凶悪な事件を起こすのであろうか。その答えは，Kの生育史の中に数多く含まれているし，「W高校生祖母殺害事件」でも同様の答えを見いだすことができる。「よい子」「優秀な子」は，親の期待に応えようとかなりの無理をしている。周囲も期待の目で見ることから，休息することも，ごまかすこともできないため，不満や苦しみがどんどん蓄積されていく。さらには，表面的には問題がないと見られているため，内面に抱えている問題が見えず，支援の機会が失われることになってしまう。

一方，「非行少年」だとか「問題児」と見られる子どもたちは，日常的に問題行動をくり返しているので，問題性が見えており，適宜支援を行うことが可能である。子どもたちにとっても，不満や悩みを「問題行動」として小出しにしており，蓄積することがなく，爆発することもない。少年司法の現場でも，非行少年と言われる少年の事件では，上記のような殺人事件の事例はほとんどなく，喧嘩や集団リンチの行き過ぎから，傷害致死として家庭裁判所に送致される事件が，時たま見られるくらいである。

通常，「問題児」と見られる子どもだけに目が向けられ，「よい子」「優秀な子」と見られる子どもは問題がないと見られることが多いが，一連の事件から，「よい子」「優秀な子」にこそ問題が蓄積している恐れがあることを考えなければならない。

⑶　優越感と劣等感の交差と挫折

「W高校生祖母殺害事件」の加害少年は「大衆・劣等生のいやらしさ」という長文の遺書を残し，祖母殺害の理由については，「エリートをねたむ貧相で無教養な大衆・劣等生を一人でも減らす」[*33]ためであると書いていおり，強烈なエリート意識が見られるが，この遺書を読んだ安田道夫検事は，東大進学の道が歩めず，W大学進学を目指さざるを得なかったという劣等感が根底にあると見ている[*34]。Kについては，携帯メールに書かれたのは，境遇やもてないことへの劣等感ばかりであるが，中学時代には，学年トップの地位を保っていたので，相当の優越感を抱いていたと見られる。たぶん，母親からも優越感を持つことを求められていたのであろう。他者と自分を比較し，優越感を感じていたからこそ家庭での重圧に耐えられたのであろう。優越感がちょっとした挫折で，簡単に劣等感に転化しており，優越感と劣等感が表裏のものであることが，２つの事件で明らかになっている。優越感で支えてきた生き方は，極めてもろいものであることが確認できる。

⑷　試行錯誤が許されず，完璧を求められる子育て・教育

一連の事件での加害者の親たちは，「優等生にする」という目標に向かい，子どもに完璧を強いてきたことが共通している。「秋葉原事件」のKの母の完璧さの追求は，これまで見てきたとおりである。「奈良高校生自宅放火殺人事件」の父親は，勉強部屋を「集中治療室」と呼んで，体罰を交えて徹底的に勉強を強いていたし，「W高校生祖母殺害事件」の被害者となった祖母も，孫を徹底的に追いつめている。

⑸　弱い子どもが追いつめられると

完璧さを求めて，子どもを追いつめている家庭は，他にもいくらでもある。身の回りを見ても，Kの家庭に近いことをしている親はそれほど珍しくない。だか，その子どもの全てが問題を起こしている訳ではない。非行という形で問題が表面化する事例はそれほど多くなく，さらに凶悪事件という形で表面化するのは，極々一部であるので，「子どもを追いつめると凶悪事件を起こす」と一般化することは正しくない。凶悪事件に至る青少年に共通しているのは，「弱さを抱えている」ことであろう，発達障害は「弱さ」そのものである。

⑹　追いつめによる逃避行動

Kのような，生育史をたどった青少年は，普通，不登校・引きこもりという形で，逃避することが多い。現にKの弟は引きこもりになったと自ら告白している。Kが引きこもりとならなかったのは，自らの苦境を他者に相談するという力を持っていたからではないかと筆者は考える。ただ，その力も中途半端であったためか，相談をしても適切に対応してくれる人と出会わなかったためかは，今後の調査課題ではあるが，結果としてはKの苦境を救済するものとはならなかった。

⑺　背後にある競争と弱者の切り捨ての社会

最後に，一連の事件が引き起こされた，社会的背景について考えてみたい。一般的に，少年非行は個人病理の問題であると共に，社会病理も強く反映しているものである。不適切養育に走った親たちの行為の背景には，新自由主義に基ずく，社会の競争の激化なしには考えられない。親たちは，激しい弱肉強食の世界にあって，自分の子どもは「負け組」にはしたくないと，心を鬼にして子どもに勉学等の強要をしていたものであり，親子ともども新自由主義社会の犠牲者であったといえる。

次に，非行や問題行動に対する，社会の非寛容度が強まっていることも無関係ではない。ゼロ・トレランスに示されるように，試行錯誤を許さない社会のあり方が，青少年を自暴自棄にさせ，最後に一花を咲かせて，死刑を待つという心境にまで追い込んだことを，真剣に考えなければならない。

注

＊1　筆者は，加害者の実名公開には成人・少年を問わず反対である。その主な理由は，実名公開で加害者本人の更生に，大きな支障をもたらせるだけではなく，家族や周辺の人の生活にまで，多大な支障をもたらせている現実を数多く見ているからである。加害者は現在被告人として実名報道されているがあえて実名は記さないことにする。

＊2　週刊現代08.6.19号，及び同6.28号，アエラ08.6.23号及び週刊新潮08.6.19号により執筆者が編集した。

＊3　加藤繁美「早期教育が育てる力，奪うもの」ひとなる書房1995年　p8（筆者要約）

＊4　久徳重森「母源病」サンマーク文庫　1991年　p22（筆者要約）

＊5　村田徹也「戦後愛知の民間教育研究運動のあゆみ」風媒社　2006年　p143

＊6　週刊現代　08.6.28号　p23

＊7　週刊現代　前掲書　p23

＊8　週刊現代　前掲書　p23

＊9　週刊朝日　08.6.27号　p21

＊10　週刊現代　前掲書　p25

＊11　週刊新潮　08.6.19号　p24

＊12　アエラ　08.6.23号　p16

＊13　アエラ前携書　p17

＊14　週刊現代　前掲書　p25

＊15　週刊新潮　08.6.19号　p24

＊16　能重真作「17歳がこころを開くとき」新日本出版社　2001年　p59

＊17　能重真作　前掲書　p59

＊18　週刊現代　08.6.28号

＊19　アエラ　前携書　p17

＊20　週刊現代　前携書　p25

＊21　高山文彦「臆病な殺人者K（原文は実名）と酒鬼薔薇聖斗」月刊現代（2008.8）p47

＊22　週刊現代　前携書　p25

＊23　アエラ　前掲書　p17

＊24　週刊朝日　08.6.27号　p19

＊25　アエラ　前掲書　p17

＊26　週刊新潮　08.6.19号　p26

＊27　08.4.5の携帯書き込み　08.6.10中日

＊28　08.6.10中日

＊29　アエラ　前掲書　p17

＊30　08.6.9中日

＊31　アエラ　前掲書　p17

＊32　碓井真史　前携書　目次

＊33　本多勝一『子供たちの復讐』朝日新聞社　1979年　p20

＊34　本多勝一　前携書　p102

（2009年9月16日受理）